自然と人の文化
多治見市文化財保護センターだより No.54　2019.10

企画展

多治見の上絵付

7/16 ～ 12/27

明治時代、多治見（旧多治見町、以下同）は陶磁器の集散地として活気にあふれていました。町の中心地を東西に走る下街道沿いには 20 軒以上の陶器商が軒を連ね、仕事を求めて他地域から移り住んできた者も多く、にぎわいを見せていました。

陶器商が多くあったことで、多治見では上絵付業が盛んになっていきます。陶器商は本焼きした陶磁器を土岐や市之倉、滝呂などから買い付け、注文主の依頼やその時々の流行に応じて上絵付業者に絵付けを依頼しました。明治時代終わりから大正時代の初めには多治見の上絵付業者は 129 軒、画工は 370 人いたといわれます。その後上絵付は赤絵銅版や転写などの技術革新を経て多治見の特色となっていきます。本展覧会では多治見の活気あふれる時代とともに上絵付の歴史を紹介します。

企画展「多治見の上絵付」
期間　令和元年 7 月 16 日（火）
～ 12 月 27 日（金）
場所　多治見市文化財保護センター展示室
入場　無料

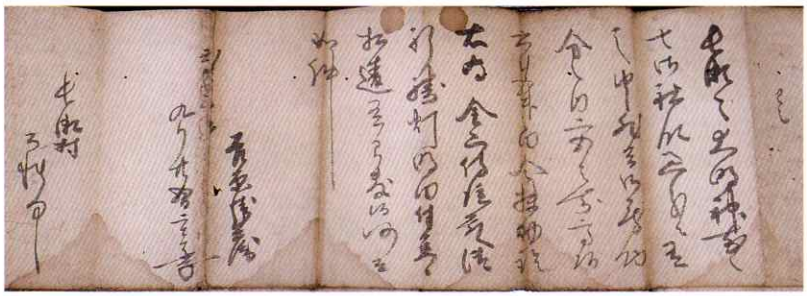
特集　長福寺の歴史と文化財

▲護摩の様子。毎月第２土曜日に行われます。

市内弁天町にある青龍山長福寺は新義真言宗智山派の寺院で、禅宗寺院の多い多治見で唯一の密教寺院です。その歴史は古く、寺伝によれば元弘年間（1331 ～ 1333）の創建とされています。元弘元年に大須宝生院の僧・道忍上人が夢のお告げで土岐川の川原に流れ着いた観世音菩薩像を見つけ、長瀬郷の有力領主・源頼氏に献上したところ、寺領 50 石を寄進され堂塔の建立を許されたとあります。また、この像は奈良時代の名僧・行基の作と伝えられています。長福寺は創建当初は七堂伽藍の寺で土岐川沿いにあったと伝えられていますが、元禄 2 年（1689）5 月の土岐川大洪水の際に流失してしまいました。しかし観世音菩薩像は守護され今も本尊として大切に安置されています。このほかに長福寺所蔵の大日如来坐像は室町時代の作とされ、優美な顔立ちや流麗な衣文、透かし彫りの光背が美しい像で、市有形文化財に指定されています。

▲市指定文化財の大日如来坐像（非公開）

文化財保護センターでは大学の専門家にご協力いただき、市図書館郷土資料室とともに数年にわたって長福寺所蔵の掛け軸や棟札、古文書調査をおこなっています。そのなかで中世から近世までの密教の教義に関わる数多くの史料や、地域との関わりを知ることのできる史料を発見することができました。中でも弘治３年(1557)に「金山侍従」の祈祷灯明田として土地寄進されたことがわかる古文書は、戦国時代に兼山城（現可児市）と関わりがあったことがわかる貴重な史料です。また、美濃国三十三所巡礼の札所として庶民の篤い信仰があったとわかる史料や、養蚕、雷除けの御符などもあり、それらから地域の暮らしに根付いた長福寺の歴史を知ることができます。



◀弘治３年の土地寄進状（非公開）

加藤助三郎家文書調査がはじまりました

加藤助三郎は明治時代に陶磁器販売店・満留寿商会を営んでいた市之倉出身の陶器商です。助三郎は陶磁器の卸売での中間利益が不当に高くされていることが価格高騰を招き、販売を抑制していると考え、全国陶磁器相場や雑報、広告等を記載した新聞「陶器商報」を発行し、陶業界の情報革命を起こした人物です。 また、明治政府の嘱託として清国を視察するなど、日本陶業界のリーダーのひとりとして知られています。助三郎はその活躍ぶりや批判に屈しない姿勢から「陶器将軍」と呼ばれました。

多治見市には、加藤助三郎家文書が保管してありますが、今年度からその調査・整理事業を公益社団法人多治見市文化振興事業団に委託することになりました。実際の作業は市図書館郷土資料室で行っています。調査・整理が終了するには長期間を要しますが、詳細な加藤助三郎の業績を後世に残す一助となるものと期待しています。

大針６号、８号及び９号古窯跡発掘調査

場所：多治見市大針町地内　調査面積：約 1,533 ㎡

期間：平成 31 年１月９日～令和元年６月 14 日

▲大針９号窯の窯体

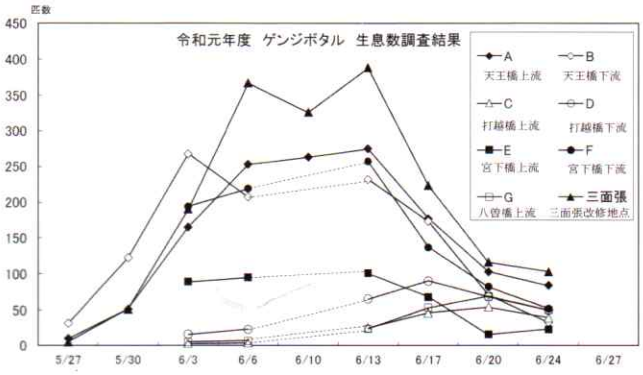
大針・北丘地区は市内で最も早くから窯業生産が始まった地域で、大針古窯跡群・大針起古窯跡群・大針屋作古窯跡群・北丘古窯跡群などを構成する 60 基以上の古窯跡が分布しています。今回の発掘調査は、国道 248 号バイパスの南に広がる山林内、標高 170 ～ 180mの西向き斜面の約 1,533 ㎡を対象としたものです。

調査の結果、６号窯は 10 世紀前半の灰釉陶器の窯で、８号窯と９号窯は 12 世紀後葉～ 13 世紀初頭の山茶碗の窯だとわかりました。このうち６号窯は窯体の上半部が調査対象地外であったため現況のまま保存されました。８号窯と９号窯は並ぶよう築かれており、８号窯が９号窯より早い時期に築かれていますが時期差はほとんどないとみられます。３基とも分焔柱を有する半地下式窖窯で、天井は全て落下していました。９号窯は、焼成室床面の最大幅が約 3.2mと、市内の山茶碗窯では最大規模のものでした。遺物は灰釉陶器・山茶碗とも碗と皿類を主体に、少数の鉢・壺・瓶類が出土しています。大針地区の窯業を知る上で貴重な発掘例となりました。

▲大針９号窯の出土遺物

令和元年度　市天然記念物北小木のホタル生息数調査結果

北小木町に毎年数多く飛び交う「北小木のホタル」の発生状況について、６月初めから７月半ばにかけて調査を行いました。



※5/27（月）と5/30（木）は調査日前のため、A、B、三面張改修地点のみ調査。6/10（月）はAと三面張改修地点のみ調査。6/27（木）は雨のため調査中止。

今年はゲンジボタル、ヘイケボタルともに大発生の年となりました。ゲンジボタルは全調査地点で多く、平成 16 年以降の調査の中で２番目の多さとなりました。特にＦ地点では、平成 10 年以降最も多くなりました。発生時期は去年と同様に例年より１週間程度早く、ピーク期間は２週間程度と長くなりました。これは成虫になる時期がばらついたことによると考えられます。ピーク時期は例年と同時期でしたが、天王橋下流のＢ地点のみ時期が非常に早くなりました。今年の発生数から鑑みると来年は減少し、数年後にはまた大発生すると推測されます。

▲北小木川を飛び交うゲンジボタル

ヘイケボタルは、特に上流のＡ２地点と一之洞地点で増加し、Ａ２ 地点では同地点の過去最高数を記録しました。ここは近くに用水路等があり常に水がある場所で、このような環境がヘイケボタルにとって住みやすいのだと分かります。北小木町では乾田にするため、近年ではホタルの数が少なくなっていますが、今後もホタルにとって良い環境が続くことを願っています。最後になりましたが、ボランティアに参加してくださった方々、北小木町や関係者の方々に、この場を借りて深くお礼申し上げます。

コウモリ調査をおこなっています

文化財保護センターでは、専門家とともに旧中央線７号トンネル内に生息するコウモリの調査を年３回行い、冬眠や繁殖の状況などを確認しています。

現在トンネル内に生息するコウモリは、キクガシラコウモリ、コキクガシラコウモリ、モモジロコウモリ、テングコウモリ、ユビナガコウモリです。キクガシラコウモリとコキクガシラコウモリは鼻の周りに菊の花のようなひだがあり、テングコウモリは鼻が少し突き出ています。これら５種のコウモリはともに胴はふさふさした毛に覆われており、蛾などの昆虫を食べます。

※トンネル内は危険ですので立ち入らないでください。

▲キクガシラコウモリの幼獣

ミニ展示　尼ヶ根（あまがね）古窯の茶陶展

期間：12 月 27 日（金）まで　　場所：文化財保護センターロビー

現在、文化財保護センターではミニ展示「尼ヶ根古窯の茶陶展」を開催しています。尼ヶ根古窯は 16 世紀後半、桃山時代に多治見市小名田町で操業していた窯で、日用雑器と茶陶を焼いていた窯です。茶陶のなかでも、初期の瀬戸黒を焼いた窯として有名です。瀬戸黒茶碗といえば、低めの高台と角張った腰、胴には大胆な篦使いが施された姿が思い浮かびますが、尼ヶ根古窯で焼かれた初期の瀬戸黒は、丸みのある腰をもち、高台は高めで、一見瀬戸黒とは思えないような姿をしています。

本展で瀬戸黒茶碗の出土品を展示していますので是非ご覧ください。

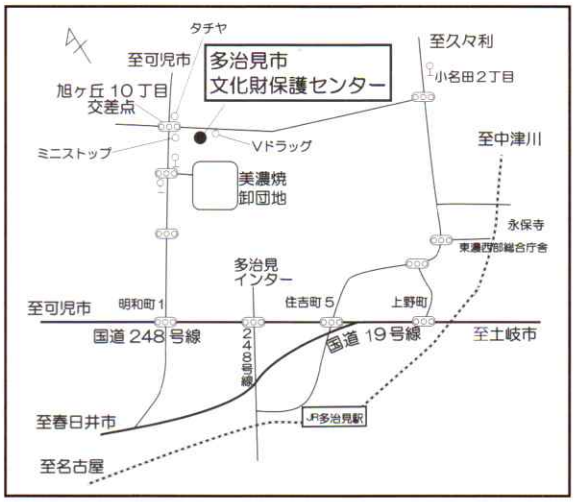
初期の瀬戸黒茶碗と高台 ▶

多治見市文化財保護センター

〒507-0071　岐阜県多治見市旭ヶ丘 10-6-26
TEL（0572）25-8633　FAX(0572）24-5033
E-mail:hogo-cen@city.tajimi.lg.jp
ホームページ：https://www.city.tajimi.lg.jp/bunkazai/

〈利用案内〉 開館時間：9:00 ～ 17:00（最終入館 16:30）
休館日：土・日・祝日、年末年始
入場：無料

〈交通案内〉 タクシー：多治見駅から約 20 分
バス：東鉄バス「美濃焼団地前」下車　徒歩 5 分



自然と人の文化　No.54　2019 年 10 月発行　　編集 / 発行　多治見市文化財保護センター
発行部数：1,500 部（税抜 40,500 円）　この冊子は環境に配慮した紙・インクを使用しています。